

*碓氷瑞穂 ―秋田市、居酒屋（かま田）

移転後の新装開店初日は大盛況に終わった。剣さんは盛岡での泊まり勤務で来られなかったが、じきに顔を出すだろう。

「んじゃ、ささやかながら歓迎会といくか。居酒屋（かま田）へようこそ大和、乾杯！」

「かんばーい！」

三つのグラスがかちんと合わさり、なみなみと注がれたビールや烏龍茶が少しこぼれた。

「いやあ、しかし助かったぜ。店もでかくなって俺と確氷だけじゃ手が回らねえからな」

「へえ、新しい店だと思ったら移転したんですか？」

新しい後輩、大和さんはくりくりとした目を丸くして釜田さんの方を見た。

「ああ。前の店は壁に風穴が空いてな」

「ぶっ……げほ、げほ、物騒ですね！？」

大和さんは烏龍茶を噴き出した。

「ちよつと大和さん、ばっちいわよ」

「あ、すみません。てへ」

ペコちゃん人形の真似をして許しを乞う。こいつ……。

「はは、かわいい後輩じゃねえか。しっかり教育しろよ」

「豪華列車でクルーをしていただけあって何だかんだしつかりしていますし、私から教えることは特にないですよ」

「え、先輩つれないなあ」

下戸でアルコールを飲んでもいないのに酔っ払いじみ

たダル絡みをしてくる後輩をよそに、私はビールのグラスを傾ける。

「大和さん」

「叶です」

「下の名前で呼ばなくても」

「いいじゃないですか呼んでくれたって」

「はあ……叶ちゃんは、どうしてここで働くことにしたの？」

「就職活動もめんどくさいし、トワイライトで店長に声かけられて、これも何かの縁かなって」

売れ残りの里芋の煮物を頬張りながらそういう彼女の顔は、それこそ里芋のように丸々としている。

「店長って呼ぶなっつたろ」

釜田さんが少し渋い顔をしながらビールを飲み干す。

彼はそのまま立ち上がり、厨房の業務用冷蔵庫の中からこれまた売れ残りの刺身を取り出し、器用に切り始めた。

「マグロとイカしかねえがそれでいいな？」

「あれ、タコありませんでしたっけ？ 結構多めに市場

で買い付けたと思うんですけど」

「あれはアヒージョにしようと思つてな、玉ねぎとマツ

シルームも余りが中途半端にある」

「いいですね、アヒージョ好きですよ。それはそうと先

輩、市場ってどこのことですか？」

私はビールで唇を湿らせて答える。

「秋田市民市場って言つて、ここから歩いて5分くらいのところにあるのよ。この店で使う材料の半分くらいはその市場でいつもお世話になってる店で入荷しているの。例えば、釜田さんが今切っている刺身は（あいはら）さんで卸してもらったものだし」

「へえ、駅の近くのなになんな市場あるんですね」

「お前にも追々通い詰めてもらうぞ、大和。目利きをみっちり仕込んでやる」

カウンターの向こうで釜田さんはニツと笑い、叶ちゃんはこの見よがしにげつという表情をした。……この二人、いい漫才コンビになれるかもしれない。

「そういえば先輩、聞いていいですか？」

「ん？ ええ、どうしたの？」

私はまたビールを飲む。

「剣さんとはどこまでいったんですか？」

今度は私がビールを吹く番だった。

「ちよっ、先輩はっちいですよ！」

「げほっ……叶ちゃん、それどこで」

動揺する私に憎らしいほどニヨニヨとした笑顔を向けながらも、少し小生意気な先輩は素直に答えてくれる。

「だって私、ダイナープレヤデスで告白されているの見ましたよ？」

何とも間の悪い話だ。私は返す言葉も無く、口元に垂れたビールを拭う。

「……もしかして、まだ返事してないんですか？」

意外と鋭い指摘に私はぎくりとした。

「……マジですか？」

「マジなんだよなあ、これが」

人数分のささやかな刺し盛りを手に、釜田さんが席に戻ってきた。

「いけませんよ先輩、そんなに相手を待たせるなんて」

もう6月ですよ！？ 告白されてからひと月近く経っているじゃないですか！」

「だって……」

正論を前に私は言い淀むしかない。

「まあまあ大和、そう人の恋路に首を突っ込むんじゃないやね」

え

「後悔してからじゃ遅いんですよ、こういうのは！ 大体、先輩は今まで彼氏いたことはあるんですか？」

「……無いわね」

「じゃあ、剣さん以外でこれからできる予定は？」

「………無いわね」

叶ちゃんは天を仰いだ。

「この機会を逃してどうすんですか、絶対落とすんですよ！ 男なんか女がその気になればイチコロなんですから」

「私は恋愛指南を頼んだ覚えはないのだけど」

冷やかな私の発言に叶ちゃんはふうとふくれっ面をしてイカ刺しを口に運んだ。

「まあまあ確氷、そうむきになるな。お前はまた若いとはいえ、それも今のうちだ。別に真面目に考える必要はねえんだ、付き合ってから好きかどうか考えるのでも遅かねえよ」

「さすが釜田さん！ バツイチの発言は説得力が違いますね！」

「大和、今月のお前の給料はなしだ」

「なんでですかあ！」

うまい具合に二人が漫才を始めてくれて、私から話題が逸れたのに内心ほっとする。初夏のほどよく脂が乗ったマグロの赤身を口に運びながら、反撃に出る。

「そういう叶ちゃんはどうかのよ、さすがにまた新しいお相手はいないの？」

「そんなのひと月ふた月でできれば苦労しませんし、それ以前に男はもうこりこりですよ。私、男を見る目無いので」

どうやら結婚相手に負債を背負わされかけたことを根

に持っているようだ。殺されてしまったことを当初は悲

しんでいたが、赤倉の正体を知ってからは罵詈雑言を憚

らなくなっていて同情のかけらも無いらしい。薄情にも

見えるけど、それで薄情になれなかったらそっちの方が

危ないだろう。

「まあまあ、そう決めつけなさんな。大和、お前はそこの年増より若いんだから」

「あの、釜田さん……さすがにあなたくらい年齢の人に年増呼ばわりされるのは心が折れるんですが……」

「はいはいおばあちゃん、しっかりして」

「誰がおばあちゃんよ！」

「お線香は三日前に上げたでしょ」

「もうちよっとマメに上げなさいよ、っていうか勝手に殺すんじゃないわよ！」

釜田さんは私の横でグラグラ笑い、私は二人をキッと睨んでから、むきになってグラスを空にした。

「しかしあれだな、こうやってささやかながら歓迎会を開いた方がいいが、まるで最初からここで働いていたかのような馴染みっぷりだな」

「私、こういう場に馴染むの割と得意なんですよ。でもここは素でやっていきますね、あはははは」

つまりトワイライトエクスプレスではずっと猫を被っていたわけだ。

「でも良かった、釜田さんも先輩も優しそうな人で」

「せっかく手に入れた即戦力だ、逃げられたら困るからな」

「またまたあ」

わっはっは、と漫才コンビが揃って大笑いする。私も釣られて笑顔になっていた。

こんなに笑ったのはいつぶりだろう、いや、もしかし

たら初めてかもしれない。

「で、先輩は何で剣さんの告白に返事しないんですか？」
いきなり話を戻され、やりたくもない主役に引きずり出される。

「つていうか、剣さんとどこで出会ったんですか？ 告白されるくらいですし、それなりに長い付き合いなんですよね？」

根掘り葉掘り聞いてくるのはいささか鬱陶しい。

「うーん……震災で、ちよつとね」

そこから先は口にせずとも、さすがに叶ちゃんも減らず口を閉じて素直に謝ってくれた。

「悪いこと聞いちゃいましたね、すみません」

「いいのよ、別に」

そこから先を口にしないのは……言えないことでもあり、言いたくないこともあるから。思い出したくも無ければ、決して忘れられないものでもあるから。

私はここにいていいのか。あの日に飛ぶたびに、答えない蟻地獄に引きずり込まれてしまう。
でも。

なぜか、あの日に一番そばにいた剣さんのことを想うと、不思議と忘れられる。

「先輩。もしかして今、剣さんのこと考えていました？」
またドキリとする。

「え、何で……？」

「見りゃ分かるだろ」

「ですよー、釜田さん」

先輩はぐいと丸みを帯びた胸を張りながら烏龍茶を飲み干し、少し赤い顔で続けた。

「だって先輩、とても穏やかで幸せそうな顔をしていたから……」